松山市の都市成長に関する考察

森　　光子

1.　本研究の目的と進め方

地方中心都市の成長には，近年めざましいものがある．松山市もその例にもれず，活溌な都市成長を遂げている．松山市を対象に，都市成長の現状を明らかにして，その背景を探ることを本研究の課題とした．研究の進め方は，まず，中四国主要六都市の比較及び高松市との比較から，松山市の全体像を把握し都市の性格を見出す（第二章）．次に，都市内部において具体的にどのように開発が進められているか，宅地化の進展状況と人口増加及び住民移動から明らかにしてゆく．特に開発の盛んな地区をとりあげて，聞きとり調査を併用しながら住宅建設・住民移動を考察する(第三章)．最後に，通勤・通学，医療サービス，購買という側面から，松山都市圏がどの地域まで広がっているのか把握する(第四章)．

2.　結　果

松山市は，四国の都市の中では最も人口を集め，最も人口増加率の高い都市として成長しているが，人口及び商業活動において県内に対する県都の集積度をみた場合，松山市は他の中四国主要都市に比べて集中率が低い．だが，松山市への集中化の傾向は他の都市より進みつつあり，他の都市が今まで行ってきた集積を，松山市は現在行っているかのような様相を呈する．松山市の人口増加は，３分の１強が社会増加であり，これは県内の他の市町村からの流入によるものである．高松市がほとんど自然増加であるのと比べると大きな相違がある．

市内の発展状況を考察すると，昭和40年頃までは中心市街地が拡大するという発展形態であったが，40年前以降，郊外でスプロール的に宅地開発が進められている．その先兵となったのは，住宅団地であった．住宅建設は旧市域に隣接する地区で盛んに行われており，特に石井，桑原，久米，余土地区など，市の南部から東部にかけての地区が多い．人口の推移からみても，上記の地区は昭和40年頃から急増し，現在でも衰えることを知らない．丁度この頃から旧市域ではドーナツ化現象を示しはじめた．昭和40年代の後半になると，市内の縁辺部も人口増加が著しくなったが，近年その増加は頭打ち状態である．

人口増加の特に激しい石井地区では，持ち家世帯と民営借家世帯の増加が多く，民営借家の割合は大きく増えている．この地区は，市内の中心部から押し出された人々と，県内の中予山間部及び南予地域から入ってくる人々が多い．また，市内の他の新興住宅地区との間や石井地区内で，かなり活溌な相互移動が行われている．

宅地化の波は松山市域外へも及んでおり，松山市の隣接市町村は，団地開発により松山市のベッドタウン化しつつある．

最後に松山都市圏の領域を各指標からとらえると，毎日の活動である通勤圏は最も領域が狭い．松山圏（一次）は，山間部を除く中予地方を中心に瀬戸内海沿岸地域にのびており，二次圏で中予山間部へ進出している．松山通学圏は通勤圏と類似しているが，二次圏では今治圏での吸引も多い．

しかし，医療サービス圏や購買圏は中予全域をおおい，さらに南予地方へのびている．今治圏と松山圏との境界は，菊間町がやや競合地域であるが，ほとんど東予と中予の境界に一致している．それに対して，松山圏は大洲圏を包含する場合もあり，中予に近い南予地方では南予の都市と松山市の両方の影響を受け，漸移的・流動的である．高次の指標では，松山市の吸引力の方が強いものもある．

以上から，松山市の都市成長は，後背地たる中予山間部と南予地方の寄与が大きいと考えられるのではないだろうか．